

## 子どものいる風景(2)

# 今、子どもたちのあそび場は……

— マンハッタン子ども博物館 —

小林 美実

子どもたちが街中の路上やちよつとした空き地で群れてあそぶ姿をとんと見なくなってしまった。今や道という道は車に占拠されてしまっている。人間はいつも自動車や自転車に気を使いながら歩いている。空き地は持ち主の自衛上、しっかり囲われている。油断しているとゴミ捨て場化するだろうし、もしそこであそんでいた子どもに事故が起きた時に

は、管理責任が問われるだろう。いやな世の中になつたものである。それだけではない。子どもをねらつた犯罪が増え続けている。今や日本でも欧米並みに、自宅の庭でも子どもを一人で外であそばせられない。おまけに日本の都会の住宅には、欧米によくある裏庭や中庭がない。どうしても建物の中であそばせてしまう。戸外で子どもの姿を見かけること



が減った理由は、少子化ばかりではない。大人も子どもも安心して暮らせない社会になってしまった。

しかし、子どもの姿を見るのは楽しい。ほっとする。時にはいらいらしたり、悲しくなるときもあるが。前回に続いて、「子どものいる風景」というテーマでしばらく私が出会ったいろいろな子どもたちの姿を書くことになった。前は私が三十年以上前、子どものあそび場に興味を持ち始めた頃の体験を書いたが、これからは最近の子どもをめぐる問題を含め、そして子どもを通して見えてくるものも書いてみたい。

ところで子どもが沢山いるところ、集まるところといえば、今は幼稚園、保育所、小学校、児童館や学童クラブなどの教育機関や公的な場所、最近では幼児期から通うお稽古所や塾やスポーツクラブ。こうした所はどちらかといえば、行かなくて



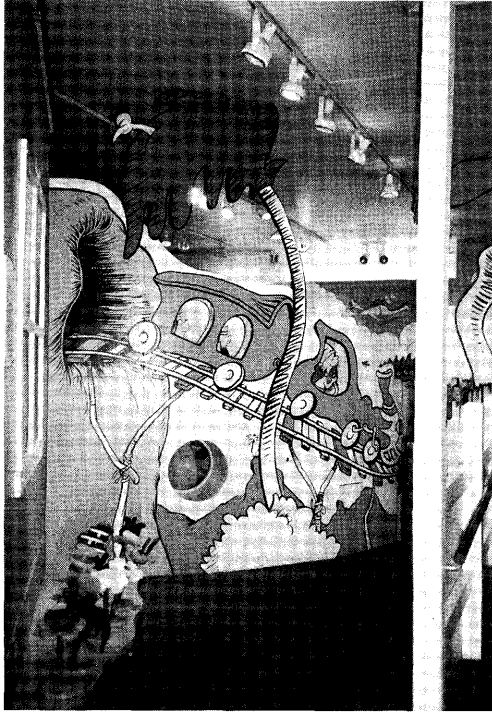
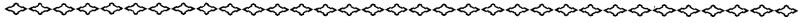
▲「マンハッタン子ども博物館」入口と筆者。あまりに地味な入口に、一度は通り過ぎてしまった。

はならない場所なのである。でも、もつと自由でエキサイティングなあそびや、もつと楽しいわくわくするような体験を期待して行く所といえば、まず公園や遊園地などがあげられよう。今回はそうしたあそび場について書いてみたい。

私たちのまわりにも沢山の公園がある。特に多いのはその地域の行政によって作られ管理されている児童公園である。ところが、身近にあるこの公園に人々はあまり興味をもたず、あることにさえ気づいていない人もいる。なぜだろうか。たしかにあまり子どももあそぶ姿をみかけない。勿論幼い子どもは親と一緒にくるのだが、親もまたそこであそぶ気分にならないようだ。何かが欠けている。滑り台、ブランコ、砂場、鉄棒、ベンチなどお決まりの固定遊具のいくつかが広さによつ



▲山を下る赤い汽車のすべり台。その側で、らくだのコブに乗ってあそぶ子どもたち。このエリアのプレイ・リーダーが、私のカメラを指さして「OK」と言ってウインクしてくれた（マンハッタン子ども博物館にて）。



▲前の頁の写真の場所を反対側から見ると、坂の下に穴があって、出入りできるようになっている。こういう仕掛けがいっぱいある。

て置かれている。しかし砂場は砂が固まったままであったり、最近では猫の糞尿などで汚染されているといわれて、放置された状態である。夏に日陰がほとんどなかったり、遊具が金属などで熱くてさわれなかったりする。

少し大きい公園では、少しでも広い場所があれば、大きい子どもたちが野球やサッカー、ドッジボールをしていて、小さい子どもがかけ回ったりする場所はない。時には、大人のゲートボールに占領されることもある。花壇があっても、子どもの摘み草はできない。都会では浮

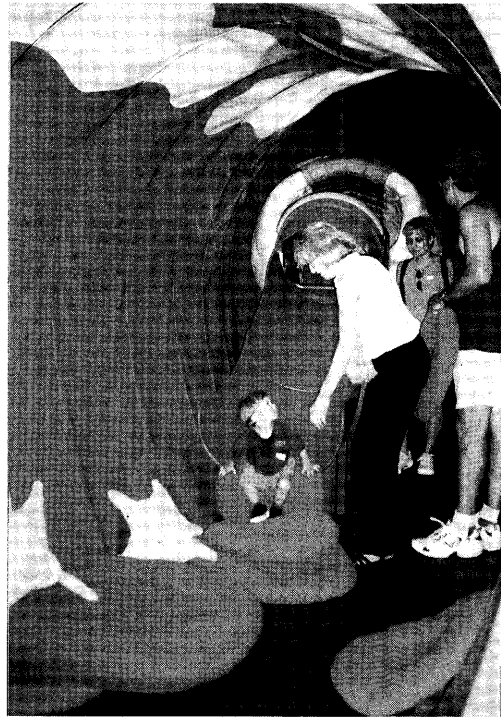
浪者が住みついていたりする。こうして特に幼い子どももの居場所はますますなくなってしまう。最近では、児童館で午前中幼児が遊べるようになった。そこは安全で、そして親子ともに仲間ができる点ではよかったと思う反面、限られた建物や室内でなく、自由な開放された環境が、子どもたちの

あそびの場所には欲しい。

今日日本で子どもたちが行きたい楽しいあそび場、公園、遊園地といえば、ディズニースタジオ、ユニバーサルスタジオ、そして全国各地ちらかちらに造られている観光地、リゾート施設、各種のテーマパークである。

これらの多くは当然なことに入場料をはじめ、けっこうお金がかかる。公的な施設ではないから、当然である。しかもその大半は客集めや経営に苦勞していると聞く。だから料金は決して安くない。

しかし子どもたちにとっては、このような巨大な豪華な遊園地であそぶ日は、一年に数回の特別な



▲体の中を模した穴やすべり台やチューブであそぶ子ども。母親の許可を受けて写した。

日、つまり祭りとおなじハレの日なのである。そこで見えるもの、聞くもの、経験することすべてが、日常の生活にはない憧れや夢の世界であったり、刺激的でエキサイティングであったりして、その日一日、子どもはいつもの自分とちがう自分を体験す

る。徹底したウソッコの世界を、その場所に行きさえすれば楽しませてもらえるのである。このようなハレの日も時にはあつて欲しい。しかしここであそぶためには費用がかかる。そしてこのような有料のあそび場が、以前は子どもたちの自由なあそび場所だった空き地や里山や雑木林をけずり、造られていく。いま子どもたちが安心して、しかも思い切りかけ回ったり、冒険したりしながら仲間を作れる自由な場所が身近にあるだろうか。

今、安全のため、保護が必要だから、健全に育てるため、などの理由で、さまざまなバリア（どのよう  
に子どものためといても、普段、教育や福祉の各施設の中だけであそぶことが許されている状態は悲しい）が張り巡らされている。その中にしか居場所のない子どもたちのために、できることは無いのだろうか。たしかに多くの国が子どもを全く無防備な状態でおくことができない社会環境になつてい

る。その中で、消極的なやり方、つまり子どもをただ安全に囲うだけでなく、子どもたちが集まりたくなる、あそびたくなる、自分から動き出したくなる、魅力あるあそび場作りを実践している国もある。日本でも児童公園など身近な気軽なあそび場をもっと面白く楽しくあそべるところに変えてみたらどうだろうか。なによりも無料である場所があそぶ気にならない場所になっていることはもったいない、少子化と社会状況の悪化は日本だけではない。私が見た最近の欧米の公園や遊園地や子どものための施設を紹介しよう。

### ニューヨークの子ども博物館で

#### 見たこと、感じたこと

ニューヨークに日本の「こどもの城」と同じような施設があるときいて、数年前セントラル・パークに近い「マンハッタン子ども博物館 (Children's

Museum of Manhattan)」へ行ってみた。こどももの城のような立派なビルを想像していたのだが、予想に反して、まったくそのあたりの普通の小さいビルとかかわらず、私も一度は通り過ぎてしまった。しかし中に入ってみると、そこはアメリカらしい超モダンでコミカルな愉快なデザインと色彩にあふれた世界だった。丁度三、四歳から小学校低学年ぐらいの子どもたちが集まって、中年の女性からこの施設についての話をきいていた。周りには子どもたちに付き添ってきた大人たちが立って、同じように話をきいている。短い説明が終わると子どもたちは完全に自由。見て回る順序などのきまりはない。さっそくあちらこちらに興奮状態で散っていく。その後を付き添いの大人たちが、これも楽しそうに急いでついていく。この後、残念なことが起きてしまった。私がかメラを持っているのを見たその女性から、館内での撮影は禁止といわれたのである。今はそれが常

識になっている。注意しなくてはならない。結局数枚室内を撮ることを認めてもらえたが、子どもは避けるようにといわれた。

この館内はどこも狭いのに、その狭さを生かした面白さ、楽しさがいっぱいだった。例えば、人間の体の中がテーマになっているフロアーでは、消化器をサイケなホルムとカラーで表現していて、大腸にあたる部分を子どもが声をたてながらすべっていく。人形の部屋も、乗り物の部屋も、小さい子どもたちが大好きな、かくれんぼをしているような穴倉風、洞窟風になっていたり、思い切りニューヨーク風なアートでつくられていて、ここは博物館という知識を得るためのところというより、この場所からいろいろな刺激をうけて子どもがあそび出すところでもあることがわかった。低いトンネルをくぐったり上ったり、壁の穴を通り抜けたり、まるでびっくり箱の中であそんでいる気分のようなだ。

私も一緒になってあちらこちらあそび歩いた。驚きがいっぱい、冒険をしているようだった。しかも周りにあるものは、どれも手でふれたり触ったり、動かしたり使ったりできる。子どもが手荒く扱ったり、ふざけたりしてこわすのではと思ったが、そのような場面は見なかった。うれしさのあまり、ぎゅつと人形を手にはなさない子どもはいたが、そのくらいのことばかりまえ。床に座って友達と話をする子ども、一緒にあそぼうとお母さんの手をひっぱっていく子ども。ここを日本語で博物館と訳すのはおかしいとさえ思った。

少し広いごく普通の部屋をのぞくと、ちょうどある家族の子どもの誕生日のパーティが、子どもの友達を招待して開かれていた。室内に沢山の風船が浮かび、ディズニーの音楽がかかり、子どもと大人がにぎやかにケーキを食べているところだった。なお、博物館の内容は時々変わるようだ。しかし体験

型であることに変わりはないとのこと。そのほかに人形劇の公演があったり、少し大きい子どもたちは、テレビの仕事を経験できたりするようだ。

ニューヨークにはこの他に、ブルックリン子ども博物館などがある。ここは内部が改造されて、もつとユニークなつくりで面白いとか。欧米の子どもの博物館は一般に体験型である。見て勉強するといふより、自分でやってみる、試してみる、そして、あそぶのである。子どもをその気にさせることがいかに難しいか、保育にかかわる者にはよくわかる。こうしてみると、日本の子どものための施設は、真面目すぎて、面白みに欠けているのではないか。例えば、まず見せて、それをことばや文字でわからせようとする。子どもが触ったり手にしたり、動き出したり、あそびだしたり出来ても、制約も多い。またそうしたくなるような刺激を持つデザインやつくりより、大人が好むような見た目のよいデザイン



ン、大人に都合のよいつくり（どこからでも子どもが見える、危なくないなど管理面の重視や、見て読んで知識を増やすなど）が優先されてしまう。

しかも、子どもについてよく知らない人々が、自分の芸術的主張のために創ろうとする。なおニューヨークで感心したのは、どこでも付き添いの大人や施設のスタッフたちが、子どもに余計な手出し口出しをせず、しかしよく子どもの様子を見ていることだった。アメリカでは、場所によってはしっかりと子どもを見守る必要があり緊張する。どこでも大人たちが子どもにかまわずおしゃべりしている姿は見られなかった。特に戸外では親は幼児と手をしっかりとつないでいる。

ニューヨークにはビルの谷間にコンクリートだらけの金網で囲われた小さいあそび場が結構たくさんある。それだけでなく、セントラル・パークを始め、少し郊外にできれば、湖や林や草原など、野外で

あそべるところがたくさんある。勿論戸外のあそび場はほとんどがお金を必要としない。この博物館も入場料は子どもも大人も六ドル、会員であれば一年中無料である。マンハッタンのビル街だけが子どもがいるところではない。また、恐竜が大好きな子どもたちにとって、すごいエキサイティングなアメリカ自然博物館のような施設も多い。一度たずねて、そこであそぶ子どもたちのいきいきした姿を見てほしい。子どもはまず教えられるより、自分でやってみたいのだ、ということがよくわかる。

今、幼い子どもたちが安全に、しかも熱中してあそべる場を作ることが必要である。狭い建物であってもそれは可能なのだと感じた。そのために大人たちに求められていることは何か。考えてみたい。

（元宝仙学園短期大学）